

日本テレビ那覇支局長

加藤 高 広

内閣府から「沖縄復帰三十周年記念写真集」雄飛する沖縄をいただいた。この中では、空港や道路などの社会資本の整備ぶりを報告、そして観光や情報通信施設など沖縄の特性を活かす取り組みを写真でわかりやすく示してくれている。ただ、ページをめくりながら

は、やはりこの「埋めていく」均（なら）していく「営みなのだ」と思う。沖縄だけでない、日本中で行われてきたことが行われた結果だということだ。この営みがないと潤わない、追いつけないことは承知している。

を。海や山のまったり風景を撮影して、被写体のバックに巨大な護岸や工事現場が写り込んでしまっているのはなあ、と感じてしまう。沖縄の、この鮮やかな印象と写真集から受ける印象の間にある現実を、自分の中で整理することがまだできない。ある沖縄の芸能に携わる人が「先人がのこしてくれた遺産に甘えていると思う」と言っていた。これは、古典をはじめ、数々の

人のあいだで、三線を習い始めたり、焼き物を始めたりする人が、最近続出している。これまで深く考えずに食べていた沖縄独特の食材に関心をもち、勉強を始めた人も知っている。「これからは文化の時代なので、世界遺産などを積極的に活用したい」と、稲嶺知事は復帰三十一年を迎えた所感を述べていた。私たちの復帰企画インタビューにこたえてくれた一人芝居の藤木勇人さんは「今の沖縄の人は、少しずつ精神的な自立や自信を回復してきていると思うし、自分もそのためにがんばっている。そんな姿を発信することで、沖縄も日本も変わっていくべきだと思う」と遠慮がちに、でも自信を持って話していた。

政府・国にとって沖縄は様々な意味で特別な存在である。だから沖縄総合事務局もある。なのに写真集では、どこにでもあるようなコンクリートのほこりっぽい色が目立つ。沖縄の鮮やかな色彩が少ないのだ。テレビで働く身としては、こういうことは気になる。



め、数々の歌や踊りの形がちゃんと伝えられていて良かったという文脈だったし、「甘えていい」とは言い過ぎかとも思うが、感覚としてはスポンと腑に落ちた。つまるところ、言葉は悪いが、食いつぶしている、切り売りしている気がする。沖縄は、発展の仕方がちがっていてもいいのではないか。むしろこれは、本土から、しかも、あとから来た者の思うことであるし、基地の問題が依然としてある。わたしの周りにいる沖縄の若い

この稿をゴールデンウィークに書いている。ことしも沖縄自動車道の許田インターが渋滞しているようだ。こんなことを聞いた。「もう南部・中部にはきれいなビーチがあまりないから仕方なくやんばるに行く。子供たちに沖縄の海はみんなこんなだったんだよー、と教える」というのだ。県外から来る観光客に聞いても、人エビーチで泳ぎたいとは思わないという。写真集から受ける印象

一方で、鮮やかな色彩を、島々の各地で目にした。多良間の八月踊りでは緑の木陰と赤・黄色の衣装を。黒島の豊年祭では青い海と青年の白い衣装を。平安座サングワチャーでは大きなはりぼての魚の金色を。与那国の豊年祭ではドウタテイの襟の黒さを。知念の浜エーグトでは豚の赤い血のいろ

「復帰四十周年記念写真集」がもし世に出るなら、開業したゆいレールや国立劇場おきなわ、そして大学院大学の写真などが載るだろう。そこには加えて、先人の遺産を伝え、発展させた、ほかにはない鮮やかな色の「沖縄の営み」が記されてほしい。そうなれば、今回の写真集には少ない「人の姿」も多く見ることができるようだろう。

* * *